論文

因果論断章

――相互作用論＋構成的認識論の視点から――

池田光義

心の働きにおいて因果推論が決定的な役割を演じていることを強調する一方、「結果を産出する力」としての原因という表象や因果関係の実在性という固定観念を破砕し、因果性を心の機能の規則性、決定性に解消したのは言うまでもなくヒュームである。そして私たちはこと因果論に関する限り、未だこの「ヒュームの残響」の中にいるという。[1] そこで、この残響にしばし聴き入ってみようというのが小稿の趣向だが、膨大な蓄積を持つヒューム解釈や因果論研究の文脈で耳を傾けることはできない。現代社会が生み出す様々なノイズを背景音にして聴けば、それがどのように響くのか、そのことを確認してみたいだけである。

I　ヒュームとカントの残響

ヒュームの議論を本稿の問題脈絡に必要な形で再構成するとこうなる。①知覚される事実は、「類似」事象間における「近接」と「継起」、及び（事象Aが現れれば常に事象Bが伴うという）「恒常的随伴」だけである。②個々の対象の属性にも対象間の関係にも、「結果を産出する原因力」の存在や因果関係の「必然性」（因果の「必然的結合」）を示すものは、知覚認識／論理的推論のいずれによっても何一つ見出すことができない。ヒュームはこれによって対象世界における原因力と因果関係の実在を否定し、因果性の成立局面を私たちの主観的な認識過程の内に移して、「必然性」の観念契機がいかにして生じるのか、その認識論的由来を問うのである。③ヒュームの答えは、因果の必然的結合は、与えられた一定の知覚・観念から知覚していない（知覚できない）一定の対象／関係の観念を実在の因果連関として自動的・機械的に構成してしまう認識機能の必然的傾向にある、というものである。④では、かかる因果構成的な認識作用の規則性はどこから来るのか。

知覚内容そのものや論理関係からではなく、対象への一定の係わり方、恒常的な経験様式に由来する。つまり、AとBの恒常的随伴を反復知覚するうちに、Aの知覚や観念が与えられると常にBという観念を連想することが「習慣化」する。この習慣を通じて、Aの知覚・観念からBの存在を自然に、つまり自動的・機械的に推論してしまうように心が「決定される」ことになる、というのだ。[2]

経験論・感覚論一般が孕む問題性には立ち入らないが、今日（あるいは既に十九世紀後半）の立場から言えば、対象や出来事は既に初めから因果連関において知覚されているのであって、孤立した個別対象・出来事それ自体の知覚なるものは事後的な観念的構成の産物に過ぎない。「単純な」知覚・認知レベルから「複雑な」思考レベルに至るまで、私たちの認識（さらには行為）過程では、幾重にも及ぶ、緩やかに連動した因果カテゴリーが認識（行為）形式・前提として機能しているのであろう。しかし、それにしても因果形式が認識・行為様式にかくも執拗に組み込まれていることの実在的根拠は何処にあるのだろうか。ヒュームは、上述の通り、因果概念の核心規定である必然性を、ある対象Aの知覚・観念が与えられれば、それとは論理的必然性もなければ知覚もできない対象Bを心理上、必然的に観念構成し、その心理的必然性を実在的必然性と見なし信憑してしまうという知覚行為の「決定性」から導き出し、この規則的な「見なし」形式は、対象間の一定の関係を知覚するパターンが、知覚行為の頻繁な反復の結果、知覚過程の普遍形式として規則化され構造化されたものだと説き明かす。この了解図式で興味深いのは、因果性が認識活動の構成・信憑作用の所産と見なされることで、形而上学的な因果実在論が否定されて因果構成論への針路が示される一方、構成作用の根拠が一定の実在的関係に対する一定の認識関係の反復効果に求められている点である。

このことは、ヒュームの構成論的志向を生かすためには、いやそのためにこそ、この構成の過程や前提や根拠を狭い認識論的枠組みを超えて存在論的連関にも定位する必要のあることを示唆しているように思える。また、彼が因果関係の実在性を否認しておきながら、因果律の必然的な構成・信憑作用が客観的に成立することを合理的に説明するために、それが一定の知覚の反復を原因として引き起こされるからだと主張し、事実上、因果関係の実在性に訴えているのも面白い。認識関係・過程を認識論的に論ずるにも、一定の存在論的了解を前提にせざるを得ず、結局、存在論的議論が避けられないし、逆もまた然りということなのだろう。直接知覚される対象の属性や関係に因果律の実在を証する事実は何一つないというヒュームの先の言説からは、その感覚論から来る一面性は別として、実体主義的な存在観が覗いて見える。そこでは、個々の事物や出来事は、初めから相互関係や環境世界から分離された孤立的、自己完結的な統一体として実体化されて捉え

られている。だから、この実体主義的な存在論の枠組みを前提とする限り、個物や事象をいかに捻くり回しても、それらの内的で必然的な結合関係を確認することは初めから不可能なのである。

この点で、ヒュームの心理主義的構成論を批判的に継承・発展させたカントの超越論的認識論が徹底した〈結合の認識論〉であることは意義深い。[3] カントにとって、認識するとは感覚・表象・概念同士を互いに「結合すること」であり、そこに「関係と統一を構成すること」である。因果認識も時間的継起において経験の総合的統一を構成することである。超越論とは、この因果構成が普遍的に成立しているというカントにとっての所与事実から出発し、「この構成作用が可能になるためには（これには依存しない）一定の主体的条件が前提になければならないが、その前提条件とは何か」と根拠率に従って問い、アプリオリに与えられた因果カテゴリーとそれに基づいて因果関係を製作する構成的な結合力を特定する試みである。だが、これによって第一に、結合力・関係構成力は完全に認識能力と等値され、因果的な結合・関係は認識作用の独占的産物と見なされるに至る。第二に、因果カテゴリーと結合力は結合行為のまさに（それ以上問うこともできなければ問う必要もない）前提条件として演繹的・論理的に導出されたものであり、因果関係の本来的起源は等閑に付されることになる。つまり、その徹底した形而上学批判の背後で、関係性を剥奪された離散的存在者を前提にする伝統的な実体論的存在論は命脈を保ち続けているのである。それどころか、認識の絶対的条件という衣装を纏うことで、むしろ永遠の存続が保証されているとさえ言えるであろう。

ヒューム／カントが先鞭をつけた構成論的試みには、こうした存在論的前提を根本的に転換する作業が伴わなくてはならない。人間の存在や行為、従ってまた認識過程も含め、事物や出来事と呼ばれる存在者を、それ自体が多次元・多様態における無数の相互作用から成り、また多次元・多様態における無数の相互作用系の一部であるかのように見なす、という存在論上の（構成的ではなく）統制的原理に従って因果問題も考えるべきだ、というのが小稿の主張の一つである。実体を相互作用・関係に解体するのはいいが、第一に、歴然たる事物や出来事の存在をどう考えるのか、何よりも解体を語る人間自身が解体されのではないか、第二に、相互作用・関係には互いに関係し作用しあう存在者が不可欠であり、作用因子・関係項なき作用・関係は概念矛盾ではないのか、という疑義が生じるかもしれない。これも長い歴史を持つ争点の一つだが、ここでは、相互作用系が時空的に多次元・多様態であること、そしてこの多次元性・多様態性の一契機に相互作用と相互作用因子、関係と関係項との相対的区別と同一性も含まれていることに注意を促すにとどめる。約めて言えば、私たちの係わる「対象」が作用態なのか因子態なのか、関係性にあるのか事物性にあるのかは、いかなる状況・関心・問題脈絡から、相互作用網の

枠組みの中でどのような存在論的位置・機能を与えるかに依存して相対的なのである。私たちが相互作用複合体を特定の個物や出来事と見なし係わることができるのも、そうした相互作用群がある次元・様態では、同一性を相対的に自己再生産する統一体として相互に／自己自身に作用していると見なし得るからに過ぎない。

Ⅱ 《相互作用》と因果関係の《構成的認識》

では、改めて、原因、結果、因果関係とは何か。考察の始点・終点は、因果を問題にし記述・討議する状況・場面そのものである。馴染の喫茶店で消閑していたとしよう。雨音に外を見やる。「いかん、雨だ。濡れるかな」。[原因：雨→結果：濡れる]（→は因果関係を示す）の推論が瞬時、作動する。「そういえば、前線が通過すると予報で言っていたな……」。[結果：雨→原因：前線の通過]の逆推論が働いたのだ。存在し行為し認識するということは、交錯する無数の相互作用の渦中で、その相対的統一体としての私たちが他の様々な相互作用系（さらにそれを介して自己自身）と相互作用することである。その中で、私たちは特別な関心、注意の対象となる事態（相互作用）に直面し、直接的／間接的に対応（作用・反作用）を迫られたとき、問題の事態（相互作用）に関わった（関わるであろう）諸々の事態、相互作用を「因果律という紙型」に従って「切り抜き」、編集し直して「私たち向け」の関係を構成するのである。この構成作業は、通常、事象の説明あるいは予測として意識されるが、その内実は、多次元・多様態に及ぶ無数の相互作用を、問題となる事象、相互作用を中心にして、なおかつそれに対する私たちの実践的な関係、有効な反作用を可能性として組み込む形で再編成・再秩序化することにある。そうすることで私たちが効果的・効率的に相互作用できるような〈行為＝認識経済的な世界連関〉を掌中にするのである。

もう少し、特定視点から抽出・構成された因果概念にはどのような特徴があるのか、その母胎となる相互作用・関係との違いに注意しながら考えてみよう。因果連鎖の典型事例とされてきたものに将棋倒しがある。時点T_m、T_nでm、n番目の駒が倒れる出来事をそれぞれO_m、O_nと表記すれば、「O_nが起きたのはO_mが起きたからだ」[O_m→O_n]と言える。しかし、[O_m＋O_n]（＋は結合を示す）を考えてみると、それは駒と地球、駒と盤面、駒と空気、駒と駒との間に働く様々な微視／巨視的相互作の複合過程でもあるし、O_mとO_nとの相互作用でもある。駒mが倒れ駒nに接するとき、駒mは一方的に駒nに作用するだけではなく、駒nからも反作用を受ける。これを駒nから見れば、駒mから圧力を受けるだけでなく駒mに反作用もしているのである（さらには空気にも作用して空気から風圧を受けた云々）。原因事象（を構成する諸要素・諸過程）は能動的かつ一方的に作用するだけでなく、結果事象（を構成する諸要素・諸過程）からも受動的に反作用を受けるし、結果

事象も受動的かつ一方的に作用を被るだけでなく、原因事象に能動的に反作用する。視点を換えれば、原因としての事象も結果としての事象もこうした相互作用全体の結果（ヘーゲル風に言えば、過程全体の反照規定）であり、［$O_m \Updownarrow O_n$］（⇕は相互作用を示す）の外部で成立するわけではない。

しかし、私たちは第一に、この無数の連続的な相互作用過程の中に切込みを入れて、明確な輪郭を示しそれ自体で（相対的に）自立・完結し纏まりを持った離散的統一体、ある種の実体・原子を構成し、かつこれに「同様なある種の実体的事態の効果・帰結」という特権的な存在論的地位／機能を付与する。その際、離散体の構成と因果性の意味付与は同じ認識過程の二面をなすものであって二つの異なる作業ではないことは明らかであろう。そして第二に、この結果という特権的事態に焦点を合わせて、複合的で相互的な作用過程から、この事態が受動的／被作用的な位置を占めるような片方の作用過程のみを切り取り、時間的な継起形式で一方向への単線的な流れとして構成する。当然、能動／受動、作用／反作用の複合性や相互性といった相互作用の本質的契機は削ぎ落とされることになる。因果関係は非対称性や不可逆性の性質で際立っていると言われるが、それはこうした事情に由来するのであろう。繰り返すが、契機Aが契機Bに作用するとき、少なくともこの限定局面では、全体としてどちらがより能動的でどちらがより受動的かの違いはあっても、そこには必ず相互性が成り立っている。この相互性にはしかし、相互前提・依存にある作用がAとBのそれぞれにとっては逆方向を向き、正反対の性格を帯びているという非対称性の契機も含まれている。基準事象をAに取るのかBに取るのかに依存して作用の方向、性格が反転する構造がそこには内在しているのだ。因果概念とはもっぱら関心事象Bを特権的中心点に据えて世界連関を見つめる視点（結果中心主義）であるから、この非対称的契機が特異的に際立つのである。

因果関係が相互作用のある種の実体化に基づくものであることを見抜いたのは、ヘーゲルの慧眼であった。が、その際、念頭に置かれていたのは、主に、結果／原因が次々と交替していく単線的な因果連鎖の表象であったように思える。その意味では、相互作用と言っても〈相互性〉よりは〈交互性〉に比重が置かれていたのである。今日的な需要から言えば、①単一連鎖としての相互作用過程ではなく、むしろ多因子×多因子の相互作用、多重相互作用×多重相互作用の複合（多系列）相互作用を基本様態と見なし、前者を後者の特殊様態として扱うことが肝要であろう。これにはさらに、②次元論的視点を加味して、私たちの因果認識が時空的尺度によって拘束されていることを認識内容そのものに組み込むことが求められる。階層的に微視か巨視か、低次か高次か、規模的に局所か広域か、短期か長期か、その時空的次元の取り方や転換の仕方に依存して因果連関は様々な相貌を見せるからだ。[4] 注目すべきは、①と②の視点からすれば、ヒューム因果論の近

接・継起条件は限られた場合にしか有効性を示さないという点である。一見して因果が近接している事例も、次元の取り方次第では遠隔事例と見なし得るし、その逆もまた然り。動かし難く見える因果の継起／前後関係も、大胆な次元転換をすれば共時化させ、さらにはある程度まで逆転させることさえできる。

最後の逆転話は、因果律の非対称性原理に著しく反し、眉唾に響くかもしれないが、そうとばかりも言えない。過去時制の任意の出来事Pは、様々な時空尺度に応じて、様々な相互作用（群）と係わり無数の因果的位置価・機能を持ち、重大な結果を招来する無数の長期・広域規模の出来事（巨視的相互作用系）の一部である。（PがPであるという「直接的」規定は私たち観測者の限定された存在位置や視点に制約されてのことであって、P自体にとっては単なる一契機に過ぎない）。現在の相互作用は過去の膨大な相互作用群の結果として刻々成立し、問題としているような巨視的規模の事象は、過去の相互作用の結果である現在・未来の相互作用群と過去の相互作用群との相互作用として不断に成立していく。その際、大局事象において特定の、例えば現在の相互作用（群）Qが重大な比重を占めているかもしれない。そして、それ以前の相互作用、例えばPが大局事象の中でその一契機としていかなる機能を果たし、いかなる効果をもたらし、またいかなる規定・作用を受けるのかは、このQの作用、つまりQの他の相互作用群との相互作用の仕方に決定的に依存しているかもしれないのである。

これに対しては、「いや、仮にP以後のQの作用により大規模事象の中でPの持つ意味や役割が影響を受けたとしても、そのことによってPがPであること、PがPとして生起したことそれ自体はもはや動かし難い事実であり、Qの作用には一切、左右されることはない」、という反論が出されるだろう。この反論はしかし、実体論的存在観と素朴実在論的認識観を前提にしてはじめて成り立つ主張ではないだろか。PはPであり、Pとして生起したというのは、私たちがPとして対象化する相互作用複合体の（それがいかに本質的であろうとも）あくまで一つの規定、一つの関係、一つの存在・作用様態でしかない。Pが多次元で多重に相互作用することで獲得する幾多の機能、効果、被規定もPの存在そのものを形成していることを想いなせば、因果の少なくとも限定的反転はそう奇異なことではなかろう。

それでもなお承服できないものが残るかもしれない。それは、〈因果継起の不可逆性〉の観念が〈過去事象の完了性・決定性〉の観念と深く結びついているからであろう。しかし、過去事象の〈決定性〉を語り得るにはどのような存在論的、認識論的前提が必要であろうか。「何かが起きた／生じた」という事態（あるいはその認識）だけでは不十分である。事態がクリアカットな一つのまとまりをなし、時空的に自己完結的・不連続的であり、現在・未来とは完全に分離していること、つまり実体的・原子的存在者で

あること、そうしたブロック状の事態が［結果／原因→結果／原因……］と一次元的・単線的に連鎖していくこと、さらにはそれがその全一性と完結性において確実に把捉できること、こうしたことが不可欠である。しかし、それはやはり実体論的存在論と素朴実在論の枠組みでしか成立しない。過去事象がある次元では相対的に完結／完了していても、他の次元では現在進行中の事象に連続し、さらには（未来になって初めて成立するであろう）複数の巨視的事態の一部、端緒である可能性は常に付きまとうのである。それは現在を生きる私たちには常に未完／未了、つまり未決定の側面が残されていることを意味している。[5]

Ⅲ　ヒューム残響の不協和と共鳴

件の①②の視点がいかに重要か、それを示唆する事態がいくつか存在する。「因果律は一定の条件下でのみ成立する」という制約条項がその一つだ。では、〈条件〉とは何か。繰り返し述べたように、因果関係とは関心事象に準拠して最も重要な相互連関を切り取ったものだが、事柄の性格上、それは可能な限りクリアカットに裁断された自己完結的なユニットであることが望ましい。しかし他方、外部からの様々な作用・干渉・影響、外部との相互作用（相乗・累積・相殺効果）は避け難い。因果関係には際立つ中心性・特権性・完結性が求められる反面、あくまでも相互作用世界の一員に留まらなければならないという制約があるのだ。この撞着に対処できるよう集合無意識的に考案されたのが〈条件〉概念なのである。サーチライトに浮かび上がる因果連鎖の背後に蠢く数多の相互作用群を完全に漆黒の闇に葬り去ることはせずに、一定の存在論的身分を一括して認知し手懐ける懐柔策と言える。

だが、それは危うい彌縫策でもある。第一に、条件概念が私たちの因果思考において跳梁し、関心事象の〈成立／不成立条件〉、〈必要／十分条件〉などとしてしばしば因果概念を無用化し、その地位を脅かしている。つまり、関心事象の説明・予測という需要を満たすには、因果概念を持ち出すまでもなく、条件概念で結構間に合うのである。むしろ、因果概念には未だ世界観的な負荷がかかり、因果力や第一原因や宿命論といった形而上学的イメージが纏わり付いているのに対し、条件概念を用いた対応はきわめて機能的・実用的で操作性に富み、現代的ニーズに至極マッチするのだ。第二に、条件概念の導入によって因果概念に絡む問題は先送りされたに過ぎない。まず、ある因果関係の条件を完全に認識・制御することはできない。それは仮にある次元で可能になったとしても、時間的・空間的に著しく異なる尺度を取れば儚い夢であることが分かる。因果関係にしろ条件にしろ、正体を糾せば、いずれも多次元に及ぶ無数の相互作用の相対的な複合・連関に過ぎないのであり、それを十全に把捉するのは人智を超えるのだ。わけても因果と条件との相互作用の反復・蓄積が因果関係に跳ね

返る再帰効果は視野から消えやすい。因果概念では、条件が因果関係に対して外的前提・枠組みとして一方的・受動的に与えられているという仕組みなっているからだ。さりとて、条件把握の精度や確実性を上げようとして様々な相互作用の連関を顧慮に入れていくと、因果関係そのものが無数の相互作用の波間に紛れて瑣末化していくことになる。因果認識の精密化が因果概念の中心性・特権性・自己完結性に背馳してしまうのである。

もっとも、原因概念の側にも意匠がないわけではない。〈主因―副因／誘因〉、〈近因―遠因〉、〈内因―外因〉というように原因内部で細分化・分業化と〈格付け〉を行うことがその一つである。そうすることで、一定の脈絡・関心・視点に応じて、因果連関内部の秩序と構造を再編しながら、適宜、外的条件も因果連関の内部に「取り込んでいく」のだ。果てしなき相互作用網から因果関係を単離する一方で、ある程度までは相互性や複合性にも目配りをしようというわけである。それはしかし、因果関係と条件との境界をますます流動化させていくことでもある。

次に、〈相互作用のスパイラル過程〉を見てみよう。「株価上昇への期待→消費の活発化→企業成績の向上→株価の上昇→さらなる株価上昇への期待→……」。因果が相互的に絡み合い反転を繰り返しながら螺旋を描いていく。ある結果が、（一段上の）結果（としての自己）を生む原因を生む。結果が自己原因に、原因が自己結果に……。しかも螺旋上昇の間にその程度は加速度をつけて劇化していく。もちろん、〈正の螺旋階段〉（良循環）ばかりとは限らない。「株価の下落→消費の減少→企業成績の悪化→さらなる株価の下落→……」といった〈負の螺旋階段〉（悪循環、悪の劇化）もある。出来事Aと出来事Bとの間に、たとえ当初は［原因→結果］の一義的・一方的関係があったとしても、［A⇄B］が反復される過程で、両者の間の因果関係は相互反転の繰り返しとなり、どちらが原因でどちらが結果か特定できなくなっていく。

互いに敵対する勢力PとQ。仮に、ある時点でPの側がQを挑発、非はPにあるとしよう。しかし、「Qが反撃→Pが大規模な報復→Qが倍返しの報復→Pがさらに……」、この応酬の反復過程が長期化・泥沼化していくとQの側に非がありと単純に言えなくなり、問題が錯綜してくるのは古今東西の紛争事例が示しているとおりだ。さらに、この相互過程が相乗的・相互増幅的であるとき、ある時点から（過去の相互作用の累積である）過程全体が原因化し、（過程を構成しているはずの）PとQは単に部分的な結果になってしまうのが恐ろしいところだ。それが何を意味するかというと、PもQもこの相互報復・憎悪増幅、つまり相互破壊の過程から途中下車できなくなる、ということだ。いずれにせよ私たちは、因果同士が反転し合い相乗的に絡み合うような現象に直面するとき、従来の因果概念では非常な困難を覚える。

既成の因果概念への不満は、現代における〈相関関係〉概念の多用となっても現れている。例えば「朝食を食べている子供ほど

学習意欲が高く体調もよい傾向が見られる」という類の調査報告が紙面をよく賑わす。学習意欲・体調qは典型的な多因子×多因子型の相互関係複合の関数であり、朝食習慣pもその一因子に過ぎない。敢えて言えば、qはむしろ規則的でバランスの取れた生活過程全体Pの一帰結である。そして、pも実はqと同様にPの一要素であると同時に結果であり指標・兆候なのである。にもかかわらず、pがqの「原因である」とは明言しなくとも、pとqとの間に「有意味な相関関係が見られる」と語るだけで、qに関して朝食が示す栄養摂取効果が事実上強調されることになるところが妙所である。

つまり、多因子の絡んだ複雑な相互作用連関が背後に潜んでいることが予想される場合でも、相関関係を持ち出しさえすれば、そうした錯綜した連関の把捉を回避し、二つの因子間の連動性を暫定的にいわば〈留保付きの擬似因果関係〉と見なして対処することが許されるのである。複雑性への意識は一応持ち合わせていることを示唆しながらも、相関項が係わる具体的な相互作用連関を明示的に特定しようとはしないし、概念としても因果性を口にすることはない。しかし操作上は、つまり実際の具体的な説明・予測の遂行過程では、相互作用の結果同士を仮設的に〈相関項〉として因果様に取り扱う。こうした便宜的な思考方式・規則が相関関係概念なのである。この概念はさらに、背景にどれだけ複雑で本質的な相互作用連関を予想するのか、その中で相関項にどのような機能をどの程度まで想定するのか等に応じて、〈弱い／強い相関関係〉、〈低い／高い相関性〉、〈本質的／表面的な相関関係〉というように様々な程度／等級／種類を区別することを許す。あるいは因果関係の所在を暗示する兆候として、探索過程における発見法上のスプリングボードと見なすこともできる。そしてそれは、何よりも確率論的な解釈・処理に最適である。

それでは、高度複雑社会に生きる私たちにとって、かのヒューム因果論からは構成論的思想以外に衣鉢を継ぐべきものは何も残らないことになるのであろうか。そう単純でもないことを最後に一瞥しておきたい。現代では事象についての複雑性意識が顕著であるとはいえ、総体的認識への志向は希薄でありその方法論も未熟である。それでいて種々の実用目的から様々な色合いを帯びた因果様対処・操作への需要は高い。そのためもあってか因果を巡る現代的言説は第一に確率論的色調を強める趨勢にある。現代において相関関係概念が重宝がられるのもこうした動向が絡んでいるわけだが、他ならぬこの点でヒューム因果論の残響は再び耳目を引くことになる。彼の因果論がその本質において、因果関係の〈必然性〉を〈蓋然性〉（その心理的対応物としての〈信念〉）に置き換える確率論的因果論であるからだ。さらに、現代因果論の第二の特徴は実用主義的傾向にあると言えるが、因果概念の必要性を、それが帰責を可能にするために不可欠な前提条件であるという社会プラグマティズムの観点からも説明しようとするヒュー

ム因果論は、この現代的傾向を遥か以前に先取りしていたのである。帰責の条件として一定の自由とともにある程度の一義的な因果関係の存在が不可欠であるという集合観念が存続し、しかも責任概念の社会的需要が高まりを見せる限り、ヒューム因果論の残響はなかなか私たちの耳を離れようとはしないのである。

かくして私たちは、ヒューム因果論の余韻と現代社会のノイズとがもたらす不協和音と共鳴現象に、当惑を覚えながらも繰り返し聴き入る仕儀となる。

注

(1) 一ノ瀬正樹『原因と結果の迷宮』、二〇〇一年、勁草書房、参照。逐一断らないが、小稿はこの書に多くを負う。その他の関連文献は割愛する。

(2) なお、ヒュームは「信念」概念を持ち出して因果構成説を補強しようとするが、ここではこの問題には立ち入らない。

(3) Cf.E.Tegtmeier, *Grundzüge einer kategorialen Ontologie*, Freiburg / München 1992. テクトマイアー自身は、「物体的／個体的実体」の伝統的観念を退けてはいるものの、今度は（ラッセル・初期ヴィトゲンシュタイン・ベルクマンらに呪縛されて）「事態」の原子論化＝実体化に陥っている。「事態」を（デイヴィドソンらに触発されて）「出来事」としても、実体化志向が本質的に変更されるわけではい。Cf. U. Meixner, *Ereignis und Substanz. Die Metaphysik von Realität und Realisation*, Paderborn 1997.

(4) さらに、③として、焦点となる相互作用群に対する認識関係を、それ自体、（行為と呼ばれる次元・様態を中軸にした）様々な次元における複合的相互作用として認識内容そのものに組み込むことの意義も強調しておきたい。筆者に比較的近い認識論的立場として、『現代思想』第32巻第11号「特集＝観測のパラドクス」（一九九六年）の諸論考、P. Janich, *Was ist Erkenntnis? Eine philosophische Einführung*, München 2000; H.Lenk, *Einführung in die Erkenntnistheorie*, München 1998. なお本稿では、過去・現在事象の説明と過去・現在事象に基づく未来事象の予測との区別・連関とそれに伴う問題には触れなかったが、①～③の視点が両者を統一的に把握することを可能にしてくれるはずである。相互作用概念の詳細については別の機会に譲る。

(5) この議論は観測者問題などの視点からも検討する必要があるが、とりあえずJ・カンピス「明示化された認識論」『現代思想』前出、参照。